

ジャンルに基づいたノンフィクションの読書指導 —Fountas & Pinnell (2012) Genre Study を対象として—

足 立 幸 子

キーワード：説明的文章，ノンフィクション読書，ジャンル，文種

1. 問題の所在

平成20年3月に学習指導要領が改訂されて以降、「言語活動の充実」の名のもと、教科書教材と他の図書資料を連動させて読ませるような授業例が増えてきた。「並行読書」「シリーズ作品の読書」「関連図書の紹介」といった言葉も頻繁に使用されている。平成29年3月の改訂においても、総則「第3 教育課程の実施と学習評価」の「1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」で、次のように書かれていることから、この傾向は続いていくことが予想される。

(2) 第2の2の(1)に示す言語能力の育成を図るため、各学年において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。あわせて、(7)に示すとおり読書活動を充実すること。
(中略)

(7) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。(下線引用者)

図書資料を読むことを授業に位置づけていけば、やがては、ジャンルというものを意識する指導になることが考えられる。文学教材に関連した図書としては、まずは「シリーズの読書」「同じ作者の作品」

などが扱われているが、これらを拡張していくと、やはり何が関連した図書資料なのかということが、問題になってくるはずだからである。

説明的文章教材については、文学よりも状況はうまくいっていないようである。例えば「くちばし」(光村図書、1年上)を取り上げてみよう。この教材では、いろいろな鳥のくちばしの形と、その鳥のえさの取り方が強く関係していることを、パターン化した構成で述べている。「言語活動の充実」のため、教師は他の鳥について書かれた本(知識の本)や、図鑑などを用意し鳥の名前、くちばしの形、えさのとり方を読み取らせようとする。しかし、それらの知識の本はもっと複雑で、構成もパターン化しているわけではない。同じジャンルの図書資料であれば、同じ読み方で読めるはずなのに、実際のところはどうもいかないのである。同様の例は、「いろいろなふね」(東京書籍、1年下)や「じどう車くらべ」(光村図書、1年下)でも見られる。これらの説明的文章教材の学習のてびきには、様々な乗り物を図鑑などで調べて「①やく目、②つくり、③できること」をカードに書いたり、「名前、しごと、(そのために)つくり」をノートに書いたりする学習活動例が示されている。教科書教材は、原典となる図書資料があったとしても、再編集され、読みやすいように作り込まれた文章である。見出しをはずしたり(平成27年度小学校教科書・平成28年度中学校教科書には、一部見出しが掲載されているものもある)、形式段落を細かく設定したり、冒頭もしくは2ないし3段落目で問題を設定したり、最後の段落で筆者の主張をまとめて示したりする。そうすることで分かりやすい教材を提供する意図は理解できるのであるが、反面、社会に流通している様々な図書資料との乖離を生じさせてしまう。

筆者の意図は、これらの授業例を否定することではない。直線的に教科書教材で学習した読み方を結びつけることができない場合があったとしても、国語科の授業において、子どもが同じジャンルの図書資料を目にすること自体に意義があると考えている。そうだとするならば、どのようにジャンルを扱っていけばよいのかということが問題になってくる。説明的文章の学習や探究的なアプローチの学習では、その内容が他教科（例えば社会科や理科）と重なるような場合、国語科で扱う範囲について議論が積み重ねられてきた。しかし、ジャンルという文章あるいはテキストの種類については、言葉を使いこなしていくための学習としてやはり国語科で扱っていくべき内容であると筆者は考える。

そこで、本稿の目的は、ジャンルに基づいたアプローチとして、どのような指導法があるのかを概観することである。対象として、Irene C. Fountas と Gay Su Pinnell による“Genre Study: Teaching with Fiction and Nonfiction Books”（Heinemann 社、2012 年刊）を選択する。本書で著者は、読むことの指導のアカデミックな研究成果をうまく取り入れつつも、教師に向けた指導法を具体的な図書例とともに提案していると言えるからである。この本で扱っている子どもの対象年齢はK年生から8年生までとなっている。なお、上述のような問題意識を示したが、本稿は、本書から日本の国語教科書と関連図書を結びつける方法を引きだそうとするものではない。なぜなら、日本の国語教科書とアメリカの読むことの教科書はかなり異なるものであるからである。しかし、彼女たちは、メンター・テキスト（中心となる図書）とその他の図書を一緒にしながら、ジャンルを指導している。そこで、Genre Study（ジャンル研究と訳しておく）とはどのようなアプローチなのか、また、その中でノンフィクションについてはどのように書かれているのかを取り上げて考察することを目的とする。

2. ジャンル研究とは

ジャンル研究の定義として、次の文を取り出すことができる。「ジャンル研究とは基礎的な探究である。その探究はいくつかのステップを踏み、様々なテキストを深い理解に基づいてナビゲートする道具を子どもに提供する」(Fountas & Pinnell, 2012, p.10)。そのステップとは、次の6ステップである。解説も含めて、引用・翻訳する (p.17)。

ステップ1. 収集する（テキストのセットを作る）

- ・読み聞かせができるようなあるジャンルのメンター・テキストのセットを作る。
- ・質が高く、より本物さが伝わるような絵本や短いテキストを選択する（可能であれば）。
- ・（幅のある難易度を含んだ）図書を集める。これらをジャンル箱に入れておく。子どもが自分で読むために選べるようにしておく。
- ・ジャンル・ブッククラブのための図書（学年のレベルにあっていて興味を持てるもの）や、ガイディッド・リーディングのグループのための図書（グループにとって適切な指導レベルのもの）を、複数冊収集する。

ステップ2. 没頭させる

- ・子どもにそのジャンルのいくつかの例を示しこれを読むことに没頭させる。教師がメンター・テキストの読み聞かせをする際には、共通の特徴について考えたり、話したり、特定したりするように子どもを励ます。
- ・そのジャンルの本で学級文庫にあるものについて、ブックトークを行う。また、子どもに個々にそのジャンルの図書を選んで読書するように促す。
- ・ブッククラブやガイディッド・リーディング・グループのために、そのジャンルの複数冊の図書を提供する。

ステップ3. 研究させる

- ・子どもが何冊かの本を読んだ後で、これらのテキストに共通する特徴を分析するようにさせる。
- ・ワークシートに、ジャンルの特徴をリストアップさせる。子どもがこれらの特徴間の相違を認識できるようにしたかどうかを確かめる。つまり、テキストには、そのジャンルの特徴を示す証拠が必ず、あるいはたいていは、あるはずである。

ステップ4. 定義する

- ・ジャンルを定義する。とりあえずの定義を作るために、特徴のリストを利用する。

ステップ5. 指導する

- ・メンター・テキストを使用して、また最初のテキスト・セットに新しいメンター・テキストを加えていく。そのリストから、重要なジャンルの特徴を詳細なミニレッスンで指導する。

ステップ6. 読ませて改訂させる

- ・自主読書についての個人カンファレンスを行って子どもの理解を広げていく。また、グループで共有する時間もとる。

- ・子どもはブッククラブ、ガイドッド・リーディングの話、リーディング・カンファレンス、そのほかの指導的な状況においても、ジャンルについて話すように奨励される。
- ・さらに学級の見取り図（チャート）に、より多くの特徴を付け加えたり、もしも必要であればジャンルのとりあえずの定義を改訂したりする。

これらの6ステップから分かることは、多くの例を出しながら、そのジャンルの特徴を導き出していくということである。まず、教師が何のジャンルかを言ってしまうのではなく、実際に読むことによって共通する特徴を洗い出し、何というジャンルかを見付けていく過程を経る。まさにステップを踏んだ探究である。

3. 各学年で扱うジャンルとKから8年生までの系統性

ジャンル研究で扱われるジャンルはどのようなものか。それをどの学年でどのように扱っていくのか。表1は、Fountas & Pinnell (2012)の242～244頁に整理された、ジャンル研究で扱うジャンルである。表1-1から表1-3にかけて、9学年分の段階が示されている。

日本でのジャンルの扱いと比較してみると、日本の教科書教材では、高校の教科書で同じジャンルの複数のテキストが配置されたジャンル配列の教科書になるが、小学校・中学校の教科書ではジャンル別ではなく学習時期による配列となっている。

しかし表1を見るとK年生から大きなジャンルの区別をさせ、徐々にジャンルを扱うジャンルを増やしていくことがわかる。また、表1で興味深いのは、ジャンル研究などの意図的な探究的アプローチをしない場合でも、読み聞かせや自主読書で自然に触れているであろうジャンルが書き込まれていることである。自然な読書の中に現れたジャンルは、後の学年でジャンル研究として扱われることが見てとれる。

さらに、この表1-1～表1-3で興味深いのは、ジャンルと形式は異なるものとしてとらえられているところと「ジャンルを越えて読むフィクション」が設定されているところである。この点については、ジャンルの分類と合わせて次でも取り上げる。

4. ジャンルの分類（ノンフィクションを中心に）

それでは、Fountas & Pinnellは、ジャンルを

どのように分類しているのであろうか。図1は、Fountas & Pinnell (2012)の20頁に掲載されたFigure 3を訳したものである。フィクションとノンフィクションを含めた全体が分かる。

図2は、このうちノンフィクションの分類をより細かく示したものである。(1)伝記的テキスト、(2)物語的ノンフィクション、(3)説明的テキスト、(4)手続き的テキスト、(5)説得的テキストの5種類が、ノンフィクションの大きな分類であることが分かる。図2を理解するために、1つ体験的な例を挙げてみる。実はこの図は、筆者は昨年の研究発表にも使用したことがある（足立、2016）。「フリードルとテレジンの小さな画家たち」（学校図書、6年上）の教科書教材（いわゆる読書教材でノンフィクションという表示）を国語科の分類では「説明的文章」としながら、Fountas & Pinnellの図2では「物語的ノンフィクション」になっているとした。しかし、参加者から「この作品は、物語構造になっているので、ノンフィクションであっても説明的文章とは言えないのではないか」という指摘があった。すなわち、ノンフィクションの分類と、説明的文章の分類（主には、説明・解説、記録・報告、論説・評論など）とは一致しないという指摘ととらえることができる。冒頭に記述した問題に対する意識も、このことでより強まった。

参考として、金沢みどり(2006)の分類を挙げる(図3)。これは、図書館情報学シリーズとなっているとおり、公共図書館の児童サービスとしての分類となっている。金沢の分類では、「フリードルとテレジンの小さな画家たち」は、児童文学の中のノンフィクションの「ルポルタージュ」に位置づけられるであろう。すなわち、ノンフィクションが児童文学に入っており、児童文学の範囲が広いということがうかがえる。また、知識の本は、ノンフィクションとは別にとらえられている。国語科教育で説明的文章との接続を考えた場合には、知識の本が孤立しているということになる。金沢の分類では、さらに、知識の本とレファレンスブックは分けてとらえられているので、知識の本と図鑑は区別されている。ジャンルの分類よりも形式・メディアによる分類の方が優先されているとも言える。Fountas & Pinnellのジャンルの分類は、これらに対し、一応メディアを越えて使用できるものと考えられる。金沢のようにメディアと合わせてジャンルを扱うのは、子どもにとって分かりやすい方法かもしれない。しかし、教科書と絵本と図鑑を全く異なるものととらえてしま

うと、冒頭に述べたような教科書教材と複数のメディアを合わせて使用することの意義を生かせなくなってしまう。複数の形式・メディアを、あるジャンルでまとめて扱っていくためには、Fountas & Pinnellのジャンル分類がよいと言える。

5. ジャンル研究における指導方法

ジャンル研究は、ジャンルを探究するような形で複数の本等を読んでいくものであるが、具体的には、次のような6つの指導法を用いる。

表1-1 ジャンル研究の段階：Kから8年生までの系統性（K～2年生）

(Fountas & Pinnell, 2012, p.242 より)

学年	K年生	1年生	2年生
それぞれの学年でのジャンル研究の段階 注：様々なタイプのフィクション（例えばミステリー、冒険物語、ホラー、ユーモアなど）やノンフィクション（例えばレポート、文学エッセイ、特集記事、インタビューなど）と同様に子どもたちはこれらのジャンルを用いて多くの様々な形式のテキスト（例えば劇、シリーズ、チャプター・ブック、グラフィック・テキスト、絵本など）を読む	<ul style="list-style-type: none"> ・フィクション対ノンフィクション ・民話 ・詩 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィクション対ノンフィクション ・リアリスティック・フィクション ・民話 ・単純な説明的テキスト（情報を伝える本） ・手続き的テキスト ・詩 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィクション対ノンフィクション ・リアリスティック・フィクション ・動物ファンタジー ・妖精物語 ・寓話 ・説明的テキスト（情報を伝える本） ・詩（特定のタイプの詩も含まれる）
探究以外で読み聞かせや自主読書を通して子どもが触れているジャンル	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・動物ファンタジー ・妖精物語 ・物語的ノンフィクション ・単純な説明的テキスト（情報を伝える本） ・手続き的テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物ファンタジー ・妖精物語 ・物語的ノンフィクション 	<ul style="list-style-type: none"> ・神話 ・説得的テキスト ・物語的ノンフィクション ・単純な伝記 ・回想

表 1-2 ジャンル研究の段階：Kから8年生までの系統性（3～5年生）

(Fountas & Pinnell, 2012, p.243 より)

学年	3年生	4年生	5年生
<p>それぞれの学年でのジャンル研究の段階</p> <p>注：様々なタイプのフィクション（例えばミステリー、冒険物語、ホラー、ユーモアなど）やノンフィクション（例えばレポート、文学エッセイ、特集記事、インタビューなど）と同様に子どもたちはこれらのジャンルを用いて多くの様々な形式のテキスト（例えば劇、シリーズ、チャプター・ブック、グラフィック・テキスト、絵本など）を読む</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・民話 ・妖精物語 ・寓話 ・説明的テキスト(情報テキスト、インタビュー) ・伝記 ・回想 ・詩(特定のタイプの詩も加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミステリー ・冒険物語 ・動物物語 ・家族・友達・学校の物語 ・グラフィック・テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・歴史的フィクション ・民話 ・妖精物語 ・神話 ・ファンタジー ・説明的テキスト(情報テキスト、特集記事、インタビュー・研究レポート) ・伝記 ・自伝 ・回想 ・物語的ノンフィクション ・詩(特定のタイプの詩を加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミステリー ・冒険物語 ・動物物語 ・家族・友達・学校の物語 ・グラフィック・テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・歴史的フィクション ・民話 ・伝説、叙事詩、物語詩 ・神話 ・説明的テキスト(情報テキスト、特集記事、インタビュー、研究レポート、文学エッセイ) ・説得的テキスト ・伝記 ・自伝 ・回想 ・物語的ノンフィクション ・詩(特定のタイプの詩を加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミステリー ・冒険物語 ・動物物語 ・家族・友達・学校の物語 ・グラフィック・テキスト
<p>探究以外で読み聞かせや自主読書を通して子どもが触れているジャンル</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・物語的ノンフィクション ・自伝 ・ファンタジー ・歴史的フィクション ・説得的テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝説、叙事詩、物語詩 ・ファンタジー ・SF ・説得的テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・SF ・ハイブリッド・テキスト

表1-3 ジャンル研究の段階：Kから8年生までの系統性（6～8年生）

(Fountas & Pinnell, 2012, p.244 より)

学年	6年生	7年生	8年生
<p>それぞれの学年でのジャンル研究の段階</p> <p>注：様々なタイプのフィクション（例えばミステリー、冒険物語、ホラー、ユーモアなど）やノンフィクション（例えばレポート、文学エッセイ、特集記事、インタビューなど）と同様に、子どもたちはこれらのジャンルを用いて多くの様々な形式のテキスト（例えば劇、シリーズ、チャプター・ブック、グラフィック・テキスト、絵本など）を読む</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・歴史的フィクション ・伝説、叙事詩、物語詩 ・神話 ・SF ・説明的テキスト(情報テキスト、特集記事、インタビュー、研究レポート、文学エッセイ、スピーチ) ・伝記 ・自伝 ・回想 ・物語的ノンフィクション ・説得的テキスト ・ハイブリッド・テキスト ・詩(特定のタイプの詩を加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冒険物語 ・ミステリー ・風刺／パロディー ・グラフィック・テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・歴史的フィクション ・伝説、叙事詩、物語詩 ・神話 ・SF ・説明的テキスト(情報テキスト、特集記事、インタビュー、研究レポート、文学エッセイ、スピーチ) ・伝記 ・自伝 ・回想 ・物語的ノンフィクション ・説得的テキスト ・ハイブリッド・テキスト ・詩(特定のタイプの詩を加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冒険物語 ・ミステリー ・風刺／パロディー ・グラフィック・テキスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアリスティック・フィクション ・歴史的フィクション ・伝説、叙事詩、物語詩 ・神話 ・SF ・説明的テキスト(情報テキスト、特集記事、インタビュー、研究レポート、文学エッセイ、スピーチ) ・伝記 ・自伝 ・回想 ・物語的ノンフィクション ・説得的テキスト ・ハイブリッド・テキスト ・詩(特定のタイプの詩を加える) ・テスト <p>ジャンルを越えて読むフィクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冒険物語 ・ミステリー ・風刺／パロディー ・グラフィック・テキスト
探究以外で読み聞かせや自主読書を通して子どもが触れているジャンル	・子どもはすべてのジャンルを越えて独立して読むべきである。	・子どもはすべてのジャンルを越えて独立して読むべきである。	・子どもはすべてのジャンルを越えて独立して読むべきである。

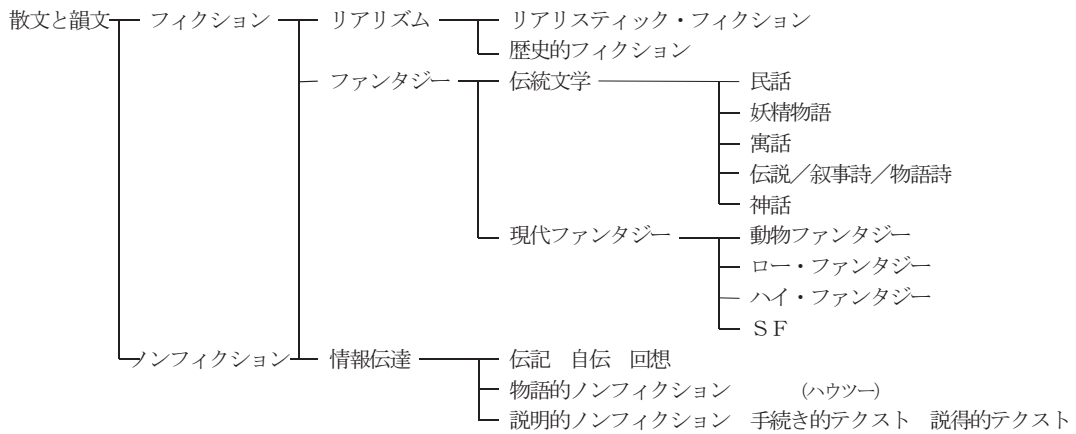


図1 Fountas & Pinnell によるジャンルの分類 (マスター図)

Fountas & Pinnell (2012) p. 20 を翻訳

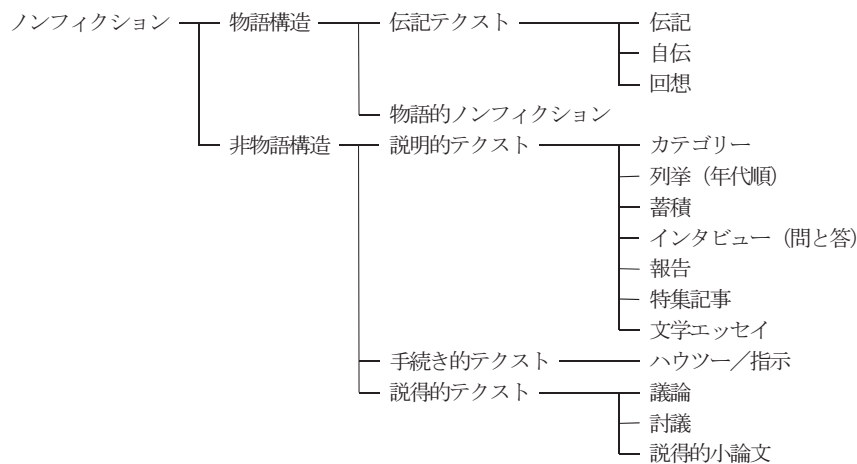
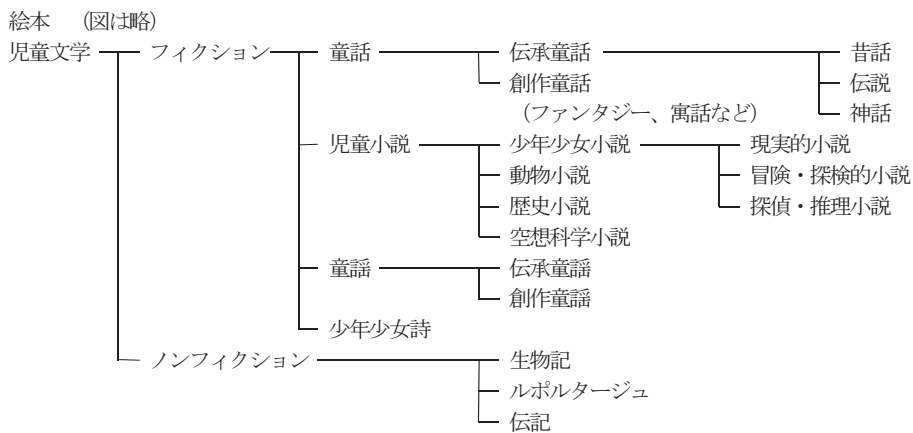


図2 Fountas & Pinnell によるジャンルの分類 (ノンフィクション)

Fountas & Pinnell (2012) p. 129 を翻訳



知識の本
レファレンスブック
本以外の資料

図3 金沢みどりによる児童文学のジャンル及びメディアの分類

金沢みどり (2006) の図3. 2 及び pp. 32-49. を要約

- (1) 交流型読み聞かせ (Interactive Read-Aloud)
 - (2) ブックトークとミニレッスン (Book Talks and Minilessons)
 - (3) 自主読書と話し合い (Independent Reading and Conferring)
 - (4) ガイデッド・リーディング (Guided Reading)
 - (5) ブッククラブ (Book Clubs)
 - (6) グループでの共有 (Group Share)
- (Fountas & Pinnell, 2012, p.289)

6. ノンフィクションのジャンル研究の指導過程

ノンフィクションのジャンル研究も、一般的なジャンル研究同様6ステップを踏んで行われる。説明的テキスト指導の過程を要約して示す。上記の6つの指導方法もここに織り込まれている (Fountas & Pinnell, 2012, pp.289-291.)。

ステップ1. 収集する

- ・同じジャンル（例えば説明的テキストならば、伝記や物語的ノンフィクションは入れない）のはっきりした事例を4～5種類用意する。

ステップ2. 没頭させる

- ・1～2週間、メンター・テキストの読み聞かせを行う。
- ・説明的テキストについてのブックトークを行い、子どもが個々に読書をするための本が選べるよう興味をひくようにする。
- ・説明的テキスト（複本が必要）を用いたブッククラブを組織する。時間外にブッククラブのグループでの話し合いの時間をとる。
- ・何種類かの説明的テキスト（複本が必要）でガイデッド・リーディング（小グループ指導）を行う。数週間にわたってレッスンをを行い、ジャンルに関係することをきちんと押さえる。
- ・いったんジャンル探究活動が始まったら、机をグループの形にし、そこに説明的ノンフィクションの本の山を置く。何冊かは子どもがすでに読んだもの、何冊かは新しいものにします。ジャンルの特徴をリストアップさせ、それをクラスで発表させる。

ステップ3. 気付かせる

次のようなことに気付かせる。

- ・トピックについて事実情報が提供されている。
- ・情報は、明瞭な文章構成の上に示されている。
- ・視覚的な特徴を含んでいる。（表、用語集、目次、見出し、絵、挿絵、写真、キャプション、ラベル、

図、発音ガイド、境界、著者紹介、注、地図など。）

ステップ4. 定義する

- ・子どもとジャンルの定義を決める。定義例：説明的ノンフィクション・テキストは、主要な話題とそれを指示する情報を与え、ある事実を説明している。

ステップ5. 指導する

- ・子どもがはっきりした例として知っているメンター・テキストを用いてジャンルの特徴をリストにし、そのリストを反映させたミニレッスンを行う。
- ・一つの幅広い特徴を示すのに、数回のミニレッスンが必要である。

ステップ6. 読ませて改訂させる

- ・もっと多くの説明的テキストを読ませ、特徴のリストをチェックしたり特徴を加筆したりさせる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、ジャンルに基づいた読書指導として、Fountas & Pinnell のジャンル研究を取り上げた。ここでは、同じジャンルの本を様々な指導法を用いながら扱い、ジャンルの特徴や定義を探究していくという方法が見てとれた。

ノンフィクションというジャンルについては、日本の教科書教材の説明的文章とは差があることが分かった。また、形式・メディアを越えてジャンルを扱っていく方法としてジャンル研究は意味がありそうである。

本稿では概観にとどまったので、今後はジャンル研究の具体的な図書例を把握しつつ、具体的な指導過程を明らかにしたい。

文 献

- 足立幸子(2016)「読者想定法を使用した説明的文章の指導—『フリードルとテレジンの小さな画家たち』を題材として—」全国大学国語教育学会第130回新潟大会自由研究発表資料2016年5月29日
- Fountas, I. C. & Pinnell, G. S. (2012). *Genre study: Teaching with fiction and nonfiction books*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- 金沢みどり(2006)『図書館情報学シリーズ7 児童サービス論』学文社